

---

盃

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

盃

### 【Nコード】

N3685D

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

昭和三十三年平和台。宿敵西鉄ライオンズとの決戦に挑む南海ホークスの指揮官山本一人は選手達を集める。そうして彼がしたこととは。古き良き時代のプロ野球のお話です。本物の野球です。

## 第一章

盃

昭和三十三年。この年はプロ野球にとって劇的な年であった。

長嶋茂雄の入団は確かにあった。だがそれと共にこの年の日本シリーズは西鉄の三原脩と巨人の水原茂の球界巖流島対決の最終幕であり鉄腕稲尾和久が今では信じられない投球により西鉄を日本一に導いたのである。これは今だに伝説として語り継がれている。

しかしこのシーズンはそれだけではなかった。ペナントもまた熾烈であったのだ。

西鉄に対するは南海ホークス。不世出の名将山本一人が率いるこのチームは地力もあり西鉄と何年も死闘を繰り広げてきていた。だが稲尾や怪童中西太、大下弘等を擁する西鉄に敗れ続けてきた。とりわけ稲尾の存在が大きかったのは言うまでもない。

稲尾に匹敵するエース。一口で済むがそんな人間はまずいなかった。不死身ではないのかと思える程である稲尾に対抗できるエースなどいないのではないかとさえ思えた。そんな南海に入ったのが杉浦忠だったのだ。

球種はストレートの他はカーブとシュートしかない。だがそのどちらもが驚異的な威力であつた。とりわけカーブはこの世のものとは思えぬもので抜群のノビのストレートと合わせてパリーグの強打者達を次々と屠つていった。

「噂通りや」

「いや、噂以上やで」

南海ファン達は大阪球場で杉浦を見て口々にこう言うのだった。彼はあまりにも凄かった。その整った容姿と物静かな性格もあり人々の人気を集めた。だがそれに驕ることもなく黙々と投げ続ける。その彼を得て南海は優勝に向かつていたのだ。

西鉄の優勝はこのシーズンは無理だというのがオールスター前の

盃

大方の意見であつた。山本もこのシーズンだけは絶対の自信があつた。

「スギヤ」

彼は言うのだった。

「スギがおる限りうちに敗北はない」

既に愛弟子になつていた杉浦を可愛がつてのうえでの言葉だつた。彼は杉浦の能力だけでなくその素直な性格にも惚れ込んでいたのだ。その彼に全てを託していたのだ。

彼はまさに無敵だつた。南海を引つ張る。オールスターまでまさに南海は独走であつた。

しかし。敵もさる者だ。三原は一代の知将と謳われた男。伊達に今まで多くの修羅場をくぐってきたわけではない。この男にも切り札があつた。

「エースを持っているのはな」

彼は記者達に対して言うのだった。

「南海だけじゃないんだよ。こっちはそれに切り札が何枚もある」

「切り札ですか」

「そうだ、何枚もな」

にやりともせず声だけで言うのだった。不気味なまでに。

「持っているんだよ、こっちは」

「それは一体」

「何ですか、監督」

「切り札について言うつもりはない」

にこりともしないままの言葉であつた。

「何もな。だが見ておいてくれ」

不気味な声が響いた。

「今年もうちが勝つからな、最後には」

こつ言い残して姿を消す。背中にはまるで霸王の様な覇気が漂つていた。

盃

記者達はその後姿を見ている。そうして口々に言うのだった。

「こりゃ三原さん」

「また企んでるな」

三原の通り名は色々ある。その中の一つに策士というものがある。彼の頭脳は抜群の切れを誇っている。その彼が何かを言う。それだけで彼等はそのに感じるものがあつたのだ。

それについて言い合う。その間ずっと三原の背を見ている。

「面白くなるかもな、今年は」

「これからな」

オールスターが終わろうとしている頃のある球場での話だ。そうして後半に入った。三原の目の光はこれまでになく強いものが宿り球場を見据えていた。

奇策が次々と炸裂する。三原が最も得意とする策略が次々と効を奏する。ビルマ戦線を生き抜き多くの死闘を潜り抜けた魔術師の知略が今湧き出ていた。

これにより西鉄は驚異的な追い上げを見せた。そうして遂に南海に追いついた。九月の終わり、両者は最後の戦いの時を迎えたのだつた。

戦場は平和台球場。言わずと知れた西鉄の本拠地だ。今南海は敵地に取り込んで西鉄と対峙したのであつた。

多くのファン達も駆けつけてきた。三塁側には南海の緑の旗が翻っている。彼等も殺気立ち西鉄ファンと睨み合っていた。

「勝つのは俺達だ！」

「いやわし等や！」

両軍は一触即発の事態になっていた。平和台は今風雲急を告げその中に南海も西鉄もいたのだつた。

南海ナインも西鉄ナインも緊張の中にいた。とりわけ負い掛けられる南海ナインの緊張はかなりのものであつた。そう、彼等は最後の戦いに向かおうとしていたのだ。

山本はかつて陸軍にいた。そこで機関銃部隊の中隊長として活躍した。生まれ着いての指導者であり裏の世界の首領達も逆らえない

程の人としての凄みを持つていた彼であつたがこの時はまさにその陸軍将校の顔になつていた。一軍の将の顔に。

彼は決断した。そうして南海のロツカーにナインを全員呼び寄せた。まさに意を決した顔でだ。山本の顔は何時になく険しく恐ろしいものであつた。

「皆来たな」

「はい」

コーチの一人が彼に答える。

「これで全員です」

「よし、ならええ」

その言葉に頷く。次に別のコーチに顔を向けて言った。

## 第二章

「あれ持つて来い」

「やるんですね」

「今しかない」

山本の声は硬くなっていた。

「今この時こそな。だからや」

「わかりました。それなら」

「頼むで」

コーチを送り出す。そうして彼はあらためて自分の前に集まるイン達を見据えたのだった。

「今日までよお頑張ってくれた」

「まずは彼等をねぎらった」

「ここまです。そして今日は」  
言葉を続ける。

「最後の戦いや。皆わかつとるわ」

「ええ」

「そやから今ここにいます」

選手達は山本の言葉に應える。彼等もまた決死の顔であった。

「戦場に行くんですわ」

「そや、戦場や」

山本は選手達の言葉に應えてまた言うのだった。

「わし等はこれから戦場に行く。生きるか死ぬかや」

「生きるか死ぬか」

「そや」

皆山本の言葉に息を飲む。張り詰めた緊張が場を支配する。

「野球選手が死ぬ場所は何処や」

山本は彼等に問うた。

「誰か答えてみい。何処や」

「球場です」

そう返事が返ってきた。

「つまり今はここです」

「その通りや」

山本は今の言葉に頷くのだった。

「ここなんや。皆ここで死ぬか？」

「命を賭けてですか」

「わしは命を賭ける」

まず山本が言った。

「ここで死ぬ覚悟や。皆はどや」

「賭けます」

最初に言ったのはショートを守る広瀬叔功であった。俊足の男だ。

「そして優勝してみせます」

「優勝か」

「そやな」

ナイン達に優勝という言葉が伝わる。自分達は今までその為に戦ってきた。そのことを再び認識する。すると心がさらに引き締まるのだった。

「その為に今までやってきたんやし」

「何年もな」

セカンドの岡本伊三美も言う。ここぞという時に打つ見出しの男だ。

「西鉄に負けてきた」

「けれど今年は違うで」

ナイン達は口々に言いだした。

「優勝や。そして」

「巨人を今年こそ」

盃  
怨敵巨人。憎んでも有り余る。その彼等を倒す為にはまずペナントを制しなくてはならない。そしてその日こそまさに今日だったのだ。

「倒す。だから今日は」

「勝つ！勝つて生きるんや！」

レフトの穴吹義雄の言葉だった。

「ええな、皆」

「そや、何があつてもな」

「勝つんや。そうでんな監督」

「そや」

山本はにこりともせずナインに応えた。

「わかつとるな。ほな今から覚悟を決める」

「覚悟を」

「来たな」

そこに先程行かせたコーチが戻つて来た。その手には一升瓶と盃があつた。それが何なのかはもう言うまでもなかつた。誰もがわかることだつた。

「これからこれで覚悟を決める」

山本は自分の前に置かれた酒と盃を前にナインに対して告げた。

「わかつたな。じゃあ一人ずつ飲んでいけ」

「わかりました」

「ほな」

一人ずつ前に出て盃を手にする。山本が手ずからそこに酒を入れる。一人、また一人と飲んでいく。誰も語らず強張つた顔で飲んでいく。

### 第三章

そうして杉浦の番になった。彼はまずはじつと山本の顔を見た。自分と同じ顔をしているのがはつきりとわかった。戦場に赴く顔であった。

「スギ」

山本は彼に声をかけた。

「わかっとなるな」

杉浦は彼の言葉に無言で頷く。それで充分であった。頷いた彼の手にする盃に酒が注がれる。そうしてそれを飲む。彼もまた意を決したのであった。

南海ナインは今戦場に向かう。誰もが無言だった。しかしそこにははつきりとわかる闘志があった。だが。戦場はそれだけではないのだ。

「来たか」

三原は三塁側ベンチに姿を現わした山本と杉浦、そして南海ナインを見て一言呟いた。

「この戦いで全てが決まるな」

「はい」

コーチの一人が彼の言葉に頷く。

「決戦の時ですね」

「巨人と戦う前のな」

三原は絶対に勝つつもりだった。だからこそその言葉だった。

「決戦だ。こっちも覚悟はできているな」

「はい」

ベンチから一斉に声が返ってきた。まるで野武士の彷徨の様な声  
が。

「何時でもいけます」

盃

「監督、いよいよですね」

「いいか」

三原は彼等の方を見ずに言った。

「この戦いが全てだ。全てここで決まる」

「ええ」

「だから俺達も」

「その意気だ。しかしだ」

ここではじめて首を動かした。稲尾を見た。

「御前はまだ出さないぞ」

「まだですか」

「カードには切り方がある」

稲尾に対してそう告げるのだった。

「今はな。だからだ」

「今日はわしは投げない」

「それは言わん」

あえて言わないとした。

「まだまだ。わかったな」

「わかりました。けれど監督」

「向こうのことはわかってる」

三原はまた三塁側ベンチに顔を見て言った。そこには彼がいた。

「昨日投げて。今日も投げるな」

「ですね」

コーチ達もそれに応える。そこには杉浦がいる。

既に昨日の戦いで先発を務めていた。十回を一人で投げ抜いている。昨日は彼の力投の前に西鉄の流線型打線は沈黙した。しかし南海打線も沈黙し双方点を入れられなかったのだ。延長戦までもつれ込みながら引き分けに終わったのである。

「凄いピッチャーだ。間違いなく歴史に残る」

三原は杉浦を見て呟いた。

「どれを取っても最高の水準にある。あの杉浦がいてこそ南海はここまで来た」

「ええ」

「それはこちらも同じ」

また稲尾を見た。

「柱になるエースがいてこそ野球になる。柱があつてこそな」

「柱ですか」

「その柱をどうするかだ」

また三塁側にいる杉浦を見た。

「いいか」

そのうえで自分達の選手に声をかけた。

「杉浦は確かに凄い。だが人間だ」

「人間ですか」

「御前達と同じ人間だ。それを忘れるな」

「化け物じゃないんですね」

「何度でも言う」

三原の言葉は毅然としていた。さながら戦場で全軍を鼓舞する將軍のようであった。彼もまたビルマでの戦いを生き抜いてきて選手獲得等で裏の世界の人間達と渡り合ってきた。策士だけではないのだ。恐ろしいまでの人間としての凄みもまた併せ持っていた。

「あいつも人間だ。わかつたな」

「わかりました」

「じゃあ監督」

主砲の一人中西が出て来た。あまり大きくはない身体だが異様なまでの威圧感がそこにはあった。それは主砲のみが持てるものであった。

## 第四章

「俺が決めていいですね」

「決めてみせろ」

杉浦を見据えたまままで中西を見てはいない。

「そのバットでな」

「わかりました。それじゃあ」

「来たぞ」

南海ナインが動いた。その中心には杉浦がいる。

「開戦だ。行けっ」

「はい」

「勝って来ます」

「一つだけ言っておく」

三原は戦場に向かう己の兵達に対してまた告げた。

「わし等の戦いはここで終わりじゃない」

「ここですか」

「巨人だ」

腕を固く組んでの一言だった。

「また巨人を破る。いいな」

「ええ、わかつてますよ」

「またあいつ等を」

彼等の言葉も引き締まった。

「潰してやらないといけませんからね」

「俺達のこの手で」

「だからこの戦いにも必ず勝つ」

選手を鼓舞する為の言葉だったがそれ以上に暗示をかけていた。

その言葉こそまさに魔術であった。選手の心を戦場に向ける言葉だ

つたからだ。

盃

「必ずな」

まずは南海の先攻だった。それは瞬く間に終わり西鉄の番になった。マウンドにいるのはやはり杉浦だった。三原はその杉浦を見てまた言うのだった。

「今日は打てるな」

「打てますか」

「ああ、見てみる」

コーチ達とナインに対して杉浦を見るように言った。

「どう思う？」

「そうですね」

ピッチングコーチが最初に応えた。

「動きが弱いですね。疲れですか」

「そう、疲れだ」

三原はそこを指摘した。

「今の杉浦は疲れている。それもかなりな」

「昨日の完封ですか」

「それもある」

だがそれだけではないと。言葉の中に添えていた。

「この一年あいつは投げ続けたな」

「はい」

「うちの稲尾と同じだ。しかしだ」

三原はここで付け加えたのだった。

「あいつは愛知に生まれて東京の大学にいた。稲尾はずっと九州にいた」

ここに大きな違いがあった。

「稲尾はずっと九州の暑さに馴れている。だから暑さにも平気だ」

「杉浦はそうではないと」

「大阪は暑い」

その暑さは三原も知っていた。後に彼は近鉄の監督に就任するがそこでもその暑さを実感することになる。

「杉浦には堪えるだろうな。特に馴れないうちはな」

「それですか」

「だから夏は怖い」

三原は言うのだった。

「乗り切っても疲れが残る。秋になろうとも」

「その疲れが杉浦にも残っていますか」

「人間だからな」

冷徹なまでの言葉が出される。それはまるでこれからの彼がどうなるかを見越しているかのようだった。だが三原の言葉はそれで終わりではなかった。

「そしてここに来た」

「九州。平和台にですか」

「わざわざここまでな。それだけで相当な体力を消耗するな」

「それでは今の杉浦は」

「昨日の完封も大きい。今までの杉浦ではないな」

それを聞いたサイン達の顔が晴れやかになる。今までの杉浦はどうしても打てなかった。ストレートの他はカーブとシュートしかないのがわかっていてもだ。そのカーブとシュート、支えるコントロールが抜群だったからだ。だから打てなかったのだ。

「そしてうちの打線は強い」

次に自分が鍛え上げ作り上げた打線を出した。当時の西鉄は文句なしに強力な打線であった。流線型打線は球界でも屈指の強さを誇っていたのだ。

「攻略は可能だ」

「わかりました。それでは」

「一気に攻めます」

「勢いだけは殺すな」

三原はまた選手達に告げた。

「一気に決める。いいな」

「はい！」

今マウンドの杉浦を見据える。杉浦は毅然として立っていた。表

情からは何も読み取れない。しかしその身体からは疲労が見えた。微かにではあるがその微かに見えるものこそがあまりにも大きいのだった。

二番の小淵泰輔が内野安打で出た。これがはじまりだった。

「内野安打か」

「打ち取ったのにな」

南海ファン達はこの勝負は杉浦の勝ちだと断定した。彼等は杉浦を超人だと確信していた。しかしこれに危惧を抱く者が南海にも二人いた。

「まずいな」

「まずいで」

言葉が出された場所はそれぞれ違っていたが。監督である山本よキャッチャーである野村克也がそれぞれ今の内野安打を見て呟いた。彼等は杉浦が疲労の限界にあるのを見て取っていたのだ。

野村は山本の方を見た。危機を彼に目で伝えたのだ。

「監督、ノムが」

コーチの一人にもそれは伝わった。野村の仇名を口にして山本に伝える。

「あかんって言うてますで」

「ああ」

山本は腕を組み口を真一文字にしていた。彼にもそれは伝わっていたのだ。

## 第五章

だが彼は。それでもこう言うしかなかった。

「スギに任せる」

それしかなかった。今頼れるのは杉浦しかなかったのだ。

「ええな」

「けれど今のスギは」

「あいつしかおらんのや」

完全に杉浦を信頼しているだけではなかった。今西鉄の流線型打線を抑えられるのは南海では杉浦しかない、それが山本には痛い程よくわかっていたのだ。だからこそ今野村の考えを退けるしかなかったのだ。そうするしかなかったのだ。

「任せる」

「そうですか」

「ここで打たれてもな」

マウンドの杉浦を見ながら言う。バッテリーボックスには大下がいる。

「心中してもええ。あいつとなら」

「盃ですか」

「そや」

山本の言葉がこれまで以上に強くなった。

「あの盃は。ただ飲んだだけちやうぞ」

「死に行く為に」

「スギと心中する。それが不服か？」

「いえ」

盃  
コーチは山本の言葉に首を横に振った。杉浦はただエースとしてだけいるのではないのだ。その穏やかで素直な性格は誰にでも好かれた。その彼と心中するのなら。今の南海ナインでそれを不満に思う者がいる筈がなかった。

「喜んで」

彼は笑って答えた。

「スギが打たれるんだったら諦めがつきますわ」

「そやな。あいつなら」

山本もようやく笑った。だが勝負を諦めたわけではなかった。杉浦の投球を最後まで見守る、そう固く決意したのである。そのうえで笑みであった。

野村もそんな山本を見た。続いて杉浦を。杉浦の身体から疲弊がはつきりわかる。残像になってそれははつきり見えていた。野村にはこの後の彼が見えた。しかしそれでも。野村もまた杉浦に全てを託すことに決めたのだった。

「仕方あらへんな」

心の中で呟いて笑った。

「スギやつたらな」

彼の目が死んでいないことも見ていた。そんな杉浦で敗れても仕方がない。彼もまた男だ。だからここは腹を括ったのである。

大下も内野安打だった。これでランナーは二人だ。西鉄は絶好のチャンスを作り上げた。そうしてバッターボックスに立つのは。

「四番サード中西」

「来たわ」

野村は中西の名がアナウンスされるのを聞いてまた呟いた。それからタイムを取ってマウンドの杉浦の方に向かうのだった。

杉浦に対して言う。簡潔に。

「力一杯投げるんや」

「力一杯か」

「ああ、今の御前の渾身の力でな」

杉浦の目を見て言うのだった。

「それだけでええ。後はわしは何も言わん」

「済まんな」

盃

杉浦は自分に対してこう言ってくれた野村に対して素直に感謝の

意を述べた。

「じゃあそうさせてもらおうわ」

「何かあつても御前を誰も批判せん」

それは野村が保障した。

「ここまで投げた御前をな」

「そうか」

「そや。だから力一杯投げたらええ」

「わかった。じゃあ投げるわ」

強い光を放つ目がその黒縁眼鏡の奥から見えた。

「このシーズンで一番ええ球をな」

「頼むで」

ここまで言つてキャッチャーボックスに戻った。そうして試合再会となった。

南海ナインは覚悟を決めていた。同時に中西もまた燃えていた。

彼は今まで絶不調だった。十二打席ノーヒットという有様だった。その状態の彼が絶好のチャンスにバッターボックスにいる。駄目ではないかと思う者がいるのも当然だった。

だがこの時の中西は違つていた。絶対の自信がそこにはあつた。

「来い」

バッターボックスにおいて心の仲で呟いた。

「どんなボールが来ても打つてやる」

その威圧感に満ちた構えを取った。それはまるで巨大な獅子がバッターボックスにいるようであつた。

一球目はボールだった。中西はそれは見送った。

二球目。野村はシュートのサインを出した。

シュートは杉浦の武器の一つだった。沈むその独特のシュートで多くのバッターを打ち取つてきた。今回もそれを期待したのだ。

「ゲッツーに取れたらええ」

野村は中西を詰まらせてそれで終わらせるつもりだったのだ。今はワンアウトだ。まさに理想の形である。

「それでこの回は終わりや」

そう思いサインを出した。杉浦もそれに頷いた。

絵にもなるような美しいフォームからボールが放たれた。そのボールは確かに杉浦の渾身のボールだった。

しかし今の杉浦は燃え尽きていた。その彼が投げるボールだ。普段のボールではない。コントロールは甘く真ん中に入ってしまった。

「まずい！」

「もらった！」

野村と中西は同時に全く違うことを脳裏に思った。

「打たれる！」

「打てる！」

両者の考えの結果は同じだった。だがそこに見るものは全く違っていた。南海は地獄へ、西鉄は天国へと行く。そうした運命の一打であった。

弾丸の様な打球が放たれた。中西独特の恐ろしい速さで何処までも飛んでいく打球であった。彼の打球はしょーとの頭上を飛び越えてそのままスタンドに突き刺さったこともある。今のそれはそのシヨートの頭上を飛び越えたのと同じものであった。

レフトスタンドの最上段に突き刺さった。看板がひしゃげボールが跳ね返る。何と一五〇メートルを越える特大アーチだった。南海を倒した一打だった。

「決まったな」

「終わったな」

そのアーチを見て三原と山本はそれぞれの口で述べた。

「これでうちの勝利は決まった」

「うちの負けや。これでな」

山本はマウンドにゆっくりと向かった。そうしてそこに立つ杉浦に対して言うのだった。

「交代やな」

「すみません」

「ええ」

謝る杉浦に対しての言葉だった。

「御前で打たれたんや。悔いはあらへんわ」

「そつや」

そこにいたナイン達も杉浦に対して言った。

## 第六章

「御前がここまでチームを引っ張ってくれたからな」

「だからここまで来れた。それでいいわ」

「すみません」

ルーキーの杉浦はあらためて彼等にすみませんと言った。だが今度のすみませんはニュアンスが違っていた。それははっきりと皆に伝わった。

「ただしや」

山本はここでにこりと笑った。そうして杉浦にまた告げた。

「来年はもつとええのを見せてもらうぜ」

「わかりました」

杉浦はこくりと頷いた。そうしてマウンドを去る。南海が敗れた瞬間だった。

三原は杉浦の降板を一塁側から黙って見ていた。彼が完全にグラウンドから姿を消してようやくまた口を開いた。

「これで南海のカードはなくなった」

「完全にですか」

「だがうちのカードは残っている」

そこに言葉を導いていった。

「こちらのはな。おい」

稲尾に顔を向けて声をかけた。

「五回からだ。いいな」

「わかりました」

稲尾はその言葉にこくりと頷いた。そうしてゆっくりと立ち上がりブルペンに向かうのだった。西鉄は切り札を切る用意をしはじめていた。勝負が決まった後で。

「確かに勝負は決まった」

三原は稲尾を見送ってからまた言った。

「しかし。南海はまだ完全には死んでいない」

「完全に止めをさす為に」

「稲尾を置いておいた」

三原の慧眼だった。彼はよく最初に二線級のピッチャーを先発させてここぞという時にエースを投入したりしている。それは切り札を切るといふ博打の感覚に似ている。実際に三原は大学卒業後暫くは株で生計を立てていたのだ。勝負師としての勘は誰にも引けは取らない男だった。

「これでわかったな」

「監督」

セカンドの仰木彬がそれを聞いて三原に声をかけてきた。

「何だ？」

「それが勝負なんですね」

そう三原に問う。

「それが」

「そつだ」

三原は表情を変えことなく仰木に答えた。

「覚えておけ。切り札はその切り方が大事だ」

「わかりました。それじゃあ」

仰木は立ち上がった。ネクストバターサークルに向かう。

「何時かわしもカード切ります」

「切ってみろ」

仰木を送り出しながら言う。

「御前の切り方でな」

「はい」

後に近鉄、オリックスで魔術を見せる男だった。彼の采配は三原のそれを彷彿とさせるとよく言われていた。その源流はここにあつたのであるうか。

盃  
予定通り稲尾は五回から登板した。決死の覚悟で向かう南海打線を抑えて見事勝利をものにした。それで勝敗は決した。

西鉄はそのシーズン優勝し日本シリーズでは稲尾がああ四連投を見せて日本一に輝いた。あまりにも有名な巖流島対決の最終幕であった。山本も杉浦も南海ナインもそれを大阪で見っていたのだった。余所者として。

「西鉄の日本一や」

「そうか」

南海ナインは大阪球場のロッカーでラジオを聴いていた。そこで戦いの成り行きを聴いていたのだった。西鉄の日本一を聴いて彼等はまずは表情を変えなかつた。

「稲尾やな」

「結局はそうやな」

そこには山本もいた。彼もその言葉に頷く。

「あの男がいたから優勝できた」

「はい」

「その通りですわ」

「御前等、稲尾は手強いやろ」

山本はふとナインに対して問うてきた。

「それもかなり。どや」

「手強いです」

岡本が素直に答えてきた。

「それもかなり」

「中々打てませんわ」

大沢啓二も言った。南海の中では異彩を放つ男である。その鋭い目はその筋の人間を思わせる程だ。だがそれと共に優しさと人間としての器も感じさせる目であった。

「けれど。ですな」

「わかるか」

山本は大沢のその言葉に応えた。

「こつちにも稲尾はおるわ」

「そうでんな」

「ちゃんと」

「スギ」

山本はロッカーの一隻で静かに座っている杉浦に声をかけた。

「来年は。見せてもらおうで」

「はい」

杉浦は静かにその言葉に応えた。

「任せて下さい」

「ああ。西鉄には稲尾がおつてうちにはスギがおる」

「こうまで言つ。」

「そのスギで。来年こそは」

「やりましようや、監督」

「来年こそは」

ナインもまた口々に言った。そうして彼等は今年の悔しさを来年にぶつけることを決めたのであった。翌年の南海の日本一、杉浦の伝説の四連投四連勝の前にはこうした決意のドラマがあつたのである。

もう遠い昔の話だ。この時戦つた戦士達は誰も現役に残つてはいない。山本、後の鶴岡一人も三原も杉浦も仰木も泉下の人となつてしまった。平和台球場も大阪球場も時の彼方に消えてしまい西鉄ライオンズも南海ホークスもその場を離れ親会社を変えてしまった。しかしこの時戦つた戦士達の心と記憶は残っている。人々の心に永遠に。それだけは消えることが永遠にない。

盃 完

2007・9・20

盃

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、

個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3685d/>

---

盃

2009年3月24日10時10分発行